

第1章 「めざす子どもの姿」



1 四日市市が進める教育の基本的な考え方

◆ 基本理念

「生きる力」「共に生きる力」をはぐくむ

平成23年度からスタートした「第2次四日市市学校教育ビジョン」の取組も4年が経過しました。本ビジョンでは、「生きる力」「共に生きる力」をはぐくむという基本理念のもと、将来の四日市市を担う人材の育成に努めています。

生きる力

将来、子どもたちにとって「生きる力」として必要な「問題解決能力」とともに、「豊かな人間性」やたくましく生きるための「健康・体力」は、「生きる力」を形作る大きな柱です。このビジョンにおいても、これらの資質や能力などを育成する取組を進めていきます。

共に生きる力

「豊かな人間関係をはぐくむコミュニケーション力」を大切にながら、「共に生きる力」をはぐくむ取組を進めます。

◆ めざす子どもの姿を実現していくための3つの視点

子どもの姿から導き出された課題について、3つの視点から整理し、常にそれらを意識した取組を進めています。

段差のない教育

子どもの成長や発達に応じた指導方法の工夫や体制の整備を図り、より滑らかに接続できるよう努め、幼保小中の学びや育ちの連続性を大切にす教育を進めます。

途切れのない支援

特別な支援を必要とする子ども、いじめ・不登校に悩む子ども、問題行動を起こす子ども、外国人幼児児童生徒等に対し、学校区・園が関係機関や家庭・地域との連携を広げながら、ネットワークを構築し、乳幼児期から就労に至るまで途切れることなく、必要な相談や支援をきめ細かく行うことができる体制づくりに努めます。

家庭・地域との協働

学校・家庭・地域のそれぞれが担う役割と責任を果たしながら「地域とともにつくる学校」の実現をめざし、学校と家庭・地域との協働をより進めていきます。

◆ めざす子どもの姿

輝く よっかいちの子ども

「生きる力」としての「問題解決能力」、「豊かな人間性」、「健康・体力」、そして、本市が大切にしている「共に生きる力」としての「豊かな人間関係をはぐくむためのコミュニケーション力」を育成することにより、それぞれ実現したい子どもの姿を次のように示します。

1 将来、社会人として生きるために必要な問題解決能力を身につけた子ども

各教科の基礎的・基本的な内容を身につけ、自分の考えをもち、自分で判断し、表現できる力や学習に取り組む意欲を高め、さまざまな問題に主体的に対応し、解決していこうとする資質や能力が向上しています。

2 自らを律しつつ、他者ととともに協調し、人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性を備えた子ども

自然体験・社会体験・生活体験や文化的な活動に積極的に参加し、豊かな人権感覚や規範意識を身につけ、将来において社会的に自己実現ができる資質や能力が向上しています。

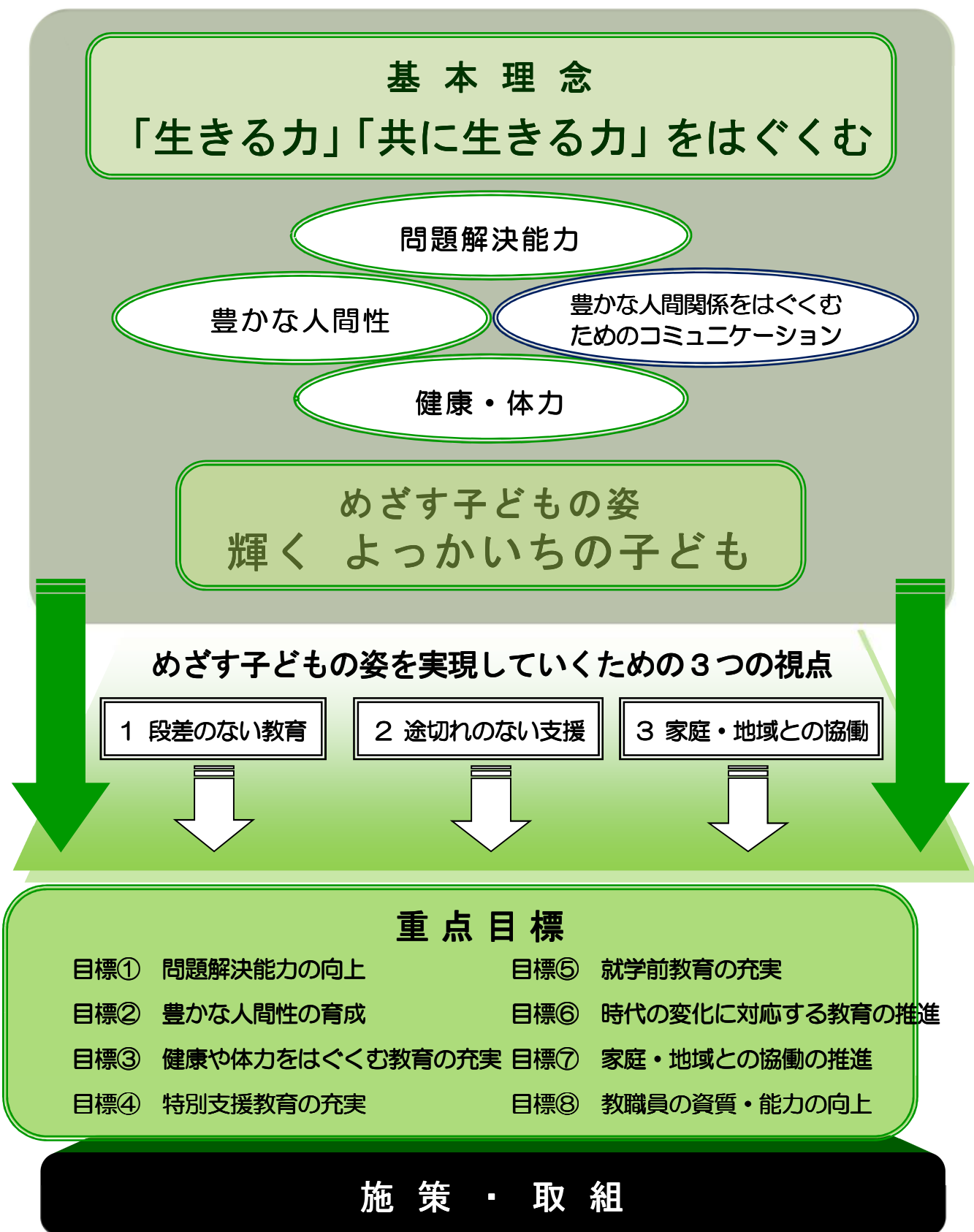
3 自他の健康・安全について実践していく力やたくましく生きるための体力を備えた子ども

仲間と関わりながら進んで運動に取り組み、生涯にわたって運動やスポーツに親しむ資質や能力とともに、自他の健康や安全について考えるなど、健康・安全を適切に管理し、改善していくための実践力やたくましく生きるための体力が向上しています。

4 他者の意見を聴き、自分の思いを伝える力を身につけ、互いに尊重し、共に向上する人間関係を築くための資質を備えた子ども

聴く力・話す力、自分と他者との関わりの中で行動できる力（社会性）が向上しています。また、他者を認め、互いに尊重し、共に向上しようとする意識をもって行動し、学習集団や生活集団、自主的・主体的活動集団の質が向上しています。

これらの力を兼ね備え、将来においても、自己の個性を生かし、他者ととともに協調し、主体的に社会にかかわろうとする社会人として成長していくことができる資質や能力を身につけた、本市のめざす子どもの姿を「**輝く よっかいちの子ども**」として示します。



2 重点目標の達成に向けた取組

◆ 重点目標の達成状況

重点目標の達成状況を把握するため、それぞれの重点目標に成果指標を設定し、その進捗状況を把握しています。

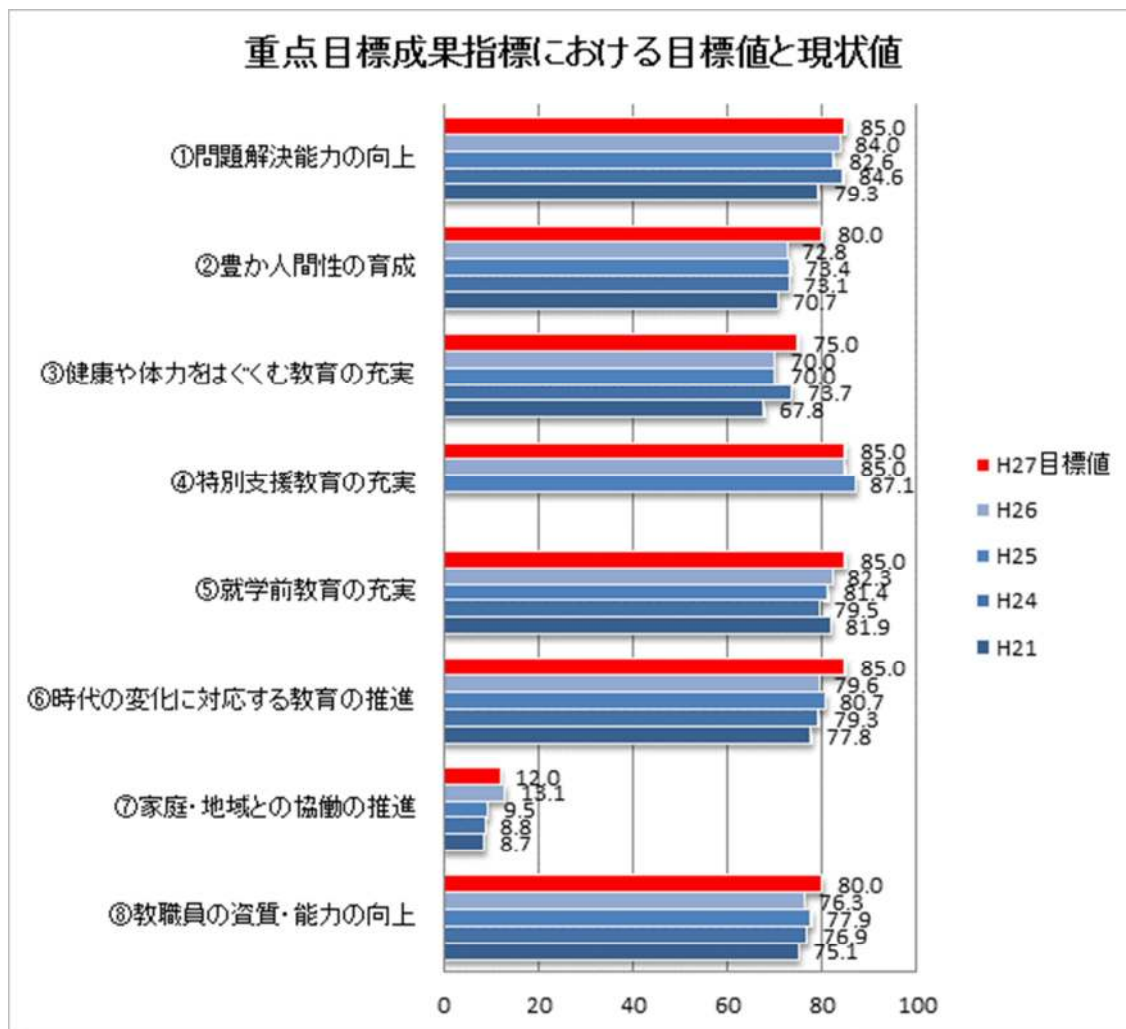
平成26年度の重点目標における成果指標の目標値と実績値

No	重点目標	成果指標	実績値 (平成26年度)	目標値 (平成27年度)
①	<u>問題解決能力の向上</u> 基礎学力の定着を図り、学ぶ意欲をはぐくむことにより、問題を解決する力を育成するとともに、社会の中で共に生きる実践的な態度や資質を育成します。	児童生徒アンケート 「授業で学習したことは、将来の役に立つと思う」(4段階評価)において「そう思う」「まあそう思う」と回答する割合 *全国学調 小6と中3の平均値	84.0%	85%
②	<u>豊かな人間性の育成</u> さまざまな学習活動や生活体験を通して、基本的な生活習慣や規範意識、自尊感情や感動する心、他者と協調し、他者を思いやる心など、豊かな人間性をはぐくみます。	児童生徒アンケート 「自分には、よいところがあると思うか」(4段階評価)において「よく思う」「時々思う」と回答する割合 *全国学調 小6と中3の平均値	72.8%	80%
③	<u>健康や体力をはぐくむ教育の充実</u> 自他の健康・安全について実践していく力や体力の向上を図り、生涯にわたって運動・スポーツに親しみ、明るく豊かな生活を営む態度や資質を育成します。	児童生徒(抽出)の体力テスト 総合評価(5段階)で3段階以上の児童生徒の割合	70.0%	75%
④	<u>特別支援教育の充実</u> 一人一人の教育的ニーズを把握し、生活や学習上の困難を改善する適切な指導や必要な支援を行い、自立し社会参加するための基礎となる力を育成します。	保護者アンケート 「障害のある子どももいない子どもも、自分の力を発揮して学習や様々な活動に参加しているか」(4段階評価)において、「そう思う」「まあそう思う」と回答する割合	85.0%	85%
⑤	<u>就学前教育の充実</u> 生涯にわたる人間形成の基礎を培う重要な時期であることから、「生きる力」「共に生きる力」の基礎となる力を育成します。	保護者アンケート 「お子さんは登園を喜んでいる」「園の生活や遊びが楽しいと言っている」(4段階評価)において「そう思う」と評価する割合	82.3%	85%
⑥	<u>時代の変化に対応する教育の推進</u> 時代の変化により生ずる課題に対し、自ら新しい知識や情報を得て、社会の変化の中を主体的に生きていく力を育成します。	児童生徒アンケート 「将来の夢や目標を持っているか」(4段階評価)において「そう思う」「まあそう思う」と回答する割合 *全国学調 小6と中3の平均値	79.6%	85%
⑦	<u>家庭・地域との協働の推進</u> 保護者・地域住民が学校づくりに主体的に参画する「地域とともに作る学校」の実現をめざすとともに、家庭・地域の教育力の向上の支援に努めます。	市政アンケート(※) 「家庭・地域の教育との連携」(5段階評価)において「非常に満足している」「満足している」と回答する割合	13.1%	12%
⑧	<u>教職員の資質・能力の向上</u> 教育への情熱を持ち、豊かな人間性を備え、自己相互研鑽を積み、確かな教師力を持った教職員をめざします。	児童生徒アンケート 「授業は、分かりやすいか」(4段階評価)において「よく分かる」「分かる」と回答する割合 *全国学調 小6と中3の平均値	76.3%	80%

※表中『全国学調』の表記は、全国学力・学習状況調査を示す。

※市政アンケート…毎年度実施の市内居住の20歳以上の市民5,000人(無作為抽出)へのアンケート

下図は、第2次四日市市学校教育ビジョン策定時の現状値（平成21年度実績値）と本年度までの実績値の推移及び平成27年度の達成目標値を示しています。



重点①「問題解決能力の向上」では、「授業で学習したことは将来の役に立つ」との問いに対し「そう思う」「ややそう思う」と回答した子どもの割合が1.4ポイント上昇しました。この成果指標については、問題解決能力を向上させるには、基礎学力の定着を図り、学ぶ意欲をはぐくむとともに、社会の中で共に生きる実践的な態度や資質を育成することが大切な要素であると考え、児童・生徒の学習意欲や目的意識を成果として評価するよう設定したものです。

学力については、子どもの意欲や意識など主観的な評価とともに、より客観的な数値を用いた指標による評価も必要であると考えます。平成27年度末に策定する第3次学校教育ビジョンにおいては、全国学力・学習状況調査の数値等、複数の指標により評価することを検討していきます。

本市では『問題解決能力向上のための授業づくりガイドブック』を活用しています。各学校では、ガイドブックに示された『四日市モデル（5つのプロセスに分けた授業

モデル)』に基づき、問題解決能力の向上を目指した授業改善に取り組んでいます。子どもの興味・関心や学習意欲を向上させ、実社会と結びつくような学習課題の一層の工夫を図ることで、社会に出ても活用できるような問題解決能力を身に付けさせることを目指しています。将来における実生活や社会と学習した知識とを関連づけるように意識して取り組んだ結果が、子どもの着実な歩みとなって表れています。

また、問題解決能力を高めるため、その基盤となる基礎学力の定着が求められています。今後も、小学校・中学校1年生 30 人学級等を活用した少人数教育、学びの一体化の取組、ICTの活用等、本市の重点施策をさらに充実をさせ、問題解決能力の基盤となる学力の向上を図る必要があります。

重点②「豊かな人間性の育成」については、昨年度と比較して 0.6 ポイントの下降が見られ、この3年ほどは、ほぼ横ばいの結果となっています。

豊かな人間性を育成するためには、生徒指導・教育相談をはじめ、道徳教育、人権教育、読書活動など、本市の施策を総合的、調和的に推進することが必要です。

また、学校だけでなく、家庭や地域との協働により、豊かな学習環境や体験活動の機会を設けることも、大切な要素となります。

今後も、基本的な生活習慣や規範意識を身につけ、他者と協調し、安心した学校生活を送ることができるような環境を整えるとともに、子どもたちの自己肯定感が高まるような活動を充実させていくことが求められます。

重点③「健康や体力を育む教育の充実」については、小学校5年生と中学校2年生に実施した8種類の体力調査の合計点を5段階（A～E）に分けたときの上位三段階（A～C）の割合を指標としています。本年度も、昨年度と同様 70%となっており、目標値の 75%を下回りました。特に小学校5年生男女と中学校2年生男子において、下位（D、E 評価）の割合が全国と比べて高いことが特徴です。

本市では、体育科（保健体育科）の授業の初めに行う「5分間運動」の取組をはじめ、子どもの運動量と質の確保に努めています。子どもたちの運動への意欲と体力の向上につなげるため、特に小学校においては、体を動かすことの楽しさを味わわせるような取組や、「つけたい力」を明確にした授業を展開することが大切です。

重点④「特別支援教育の充実」については、昨年度に比べ、2.1 ポイント下がりましたが、目標値の 85%は達成している状況です。

本市では、校・園内特別支援教育の推進体制の充実とともに、教育委員会が、こども未来部、健康福祉部と連携し、早期から一貫した教育支援システムを構築してきました。保護者からは、一定の評価を得ていますが、施策の内容についてさらに理解を進める必要があります。今後は、一人一人の教育的ニーズや保護者の考えに応じた適切な指導・支援が行えるよう、基礎的環境整備や合理的配慮等について整備を図っていく必要があります。

重点⑤「就学前教育の充実」については、昨年度に比べ0.9ポイント上昇しました。「お子さんは登園を喜んでいますか」「園の生活や遊びが楽しいと言っていますか」との問いに対し、「そう思う」と肯定回答する保護者の割合が、徐々に増加していることがわかります。本市の幼稚園では、遊びを通じた体験が、その後の生きる力へつながることを重視しています。幼児の遊びを充実させるため、年齢や発達課題に応じた環境構成を行い、幼児の特性に応じた指導の工夫を行っています。さらに、遊びを通じた学びの充実を目指し、公開保育を積極的に取り入れ、教職員の研修を深めています。

このような取組に加え、園のHP等を活用した積極的な情報提供により、子どもも保護者も安心して楽しく過ごせる教育環境をつくっていることが、これらの成果につながっているとと言えます。

重点⑥「時代の変化に対応する教育の推進」においては、昨年度を1.1ポイント下回りました。各校では、就学前から小・中学校までの子どもの成長を見通したキャリア教育に関する指導計画が作成され、それをもとに社会の変化に対応し、主体的に生きていく力を育成するキャリア教育の取組が定着しつつあります。一方、子どもを取り巻く環境は大きく変化し、社会や職業の在り方そのものが大きく変わる可能性もあります。

今後も、学校で学ぶことと社会とのつながりを意識しながら、将来の生き方や社会における自らの役割を考えさせるような教育を進めることが求められます。

重点⑦「家庭・地域との協働の推進」については、成果指標となる市政アンケートの結果が平成21年度からほぼ横ばいとなっていました。平成26年度は昨年度と比較して3.6ポイント上昇し、目標値を上回りました。

四日市版コミュニティスクールの指定校は17校に増え、その他の学校・園に設置する学校づくり協力者会議とともに、その取組の充実が成果につながってきたものと考えられます。また、平成26年度から施行が始まった「土曜日を活用した教育活動（土曜授業）」も、家庭や地域が学校に主体的にかかわるよい機会となっています。

今後も、地域に開かれた学校、地域とともにつくる学校を目指し、家庭・地域とともに子どもを育む取組を進めていきます。

重点⑧「教職員の資質・能力の向上」については、昨年度と比較して1.6ポイントの下降となりました。教師力向上研修の取組や評価の活動は定着してきましたが、その成果を授業に生かし、児童生徒の満足度のさらなる向上につなげていく必要があります。また、若手教員が増加する中、その育成が急務となっています。授業における課題の提示方法や指導方法等の工夫・改善を重ね、わかりやすい授業づくりを進めるなど、授業実践を主軸に据えたOJTを各校において充実させることが求められます。

今後も教職員の年齢構成は大きく変化することが見込まれるため、従来型のライフステージ別研修などの充実を図るとともに、新たな教職員研修の構築が求められます。

3 データから見える子どもの姿

平成26年度に全小中学校において実施した「全国学力・学習状況調査」のデータからは、子どもの学力の状況とともに、学習を取り巻く環境が見えてきます。本調査結果のデータに基づき、四日市市の子どもの姿を分析しました。

1 本市の学力の状況（平成26年度全国学力・学習状況調査の分析から）

○本市における全国学力・学習状況調査 正答率の推移

本年度の本市の各教科の平均正答率は、小学校においては、国語のA及びB問題、算数のA及びB問題で三重県平均をわずかに上回りましたが、全国平均は下回りました。中学校においては、国語のA及びB問題、数学のA問題及びB問題で、全国平均及び三重県平均を上回りました。

小学校		国語		算数		理科	
		A(知識)	B(活用)	A(知識)	B(活用)		
平成19年度	本市	81.7	62	81.6	62.1		
	三重県	80.6	60	81.1	61.4		
	全国(公立)	81.7	62	82.1	63.6		
平成20年度	本市	64.1	47.8	71	50.1		
	三重県	62.9	47.1	70.9	49.7		
	全国(公立)	65.4	50.5	72.2	51.6		
平成21年度	本市	68.4	46.8	76	53.1		
	三重県	67.8	46.9	76	52.5		
	全国(公立)	69.9	50.5	78.7	54.8		
平成22年度 抽出校：40校 中、12校参加	本市	81.9	74.3	71.8	47		
	三重県	81.7	75.2	72.4	47.3		
	全国(公立)	83.3	77.8	74.2	49.3		
平成24年度	本市	79.1	51.4	72.6	56.1		58.1
	三重県	79.6	52.7	72.2	56.8		58
	全国(公立)	81.6	55.6	73.3	58.9		60.9
平成25年度	本市	60.7	47.5	76	55.8		
	三重県	60.3	46.7	75.8	55.3		
	全国(公立)	62.7	49.4	77.2	58.4		
平成26年度	本市	69.7	53.6	76.7	56.7		
	三重県	69.6	52.5	76.2	56		
	全国(公立)	72.9	55.5	78.1	58.2		

中学校		国語		数学		理科	
		A(知識)	B(活用)	A(知識)	B(活用)		
平成19年度	本市	82.2	73	76.1	64.1		
	三重県	81.6	71	73.1	60.6		
	全国(公立)	81.6	72	71.9	60.6		
平成20年度	本市	73.3	60	65	50.7		
	三重県	72.6	59.4	63.7	49.3		
	全国(公立)	73.6	60.8	63.1	49.2		
平成21年度	本市	76.4	74.4	64.3	58		
	三重県	75.9	73.3	62.7	56.5		
	全国(公立)	77	74.5	62.7	56.9		
平成22年度 抽出校：22校 中、10校参加	本市	76.1	66	68.5	45.8		
	三重県	74.1	64.1	65.4	42.8		
	全国(公立)	75.1	65.3	64.6	43.3		
平成24年度	本市	75.8	63.5	64	49.5		52.2
	三重県	74	61.1	61.6	48		50.6
	全国(公立)	75.1	63.3	62.1	49.3		51
平成25年度	本市	75.9	66.6	64.5	40.6		
	三重県	75	65.8	63.2	39.3		
	全国(公立)	76.4	67.4	63.7	41.5		
平成26年度	本市	79.9	51.3	69.9	60.5		
	三重県	78	49	67.1	58.3		
	全国(公立)	79.4	51	67.4	59.8		

※ 平成23年度については、東日本大震災により実施していない。

○国語科の学力の状況

小学校においては、全国の傾向と同様、B問題に課題が見られました。特に、書いてある内容や情報を読み取り、自分の意見や考えを根拠にして、言葉や文章で表すことに課題がみられました。与えられたテキスト（図や表などの資料）を論理的に分析し、表現する力をつける必要があります。

また、A問題における基礎的・基本的な知識・技能を問うような問題、例えば「漢字の読み書き」「ことわざ・慣用句」「故事成語の使い方」についても、やや課題が見られました。基礎的・基本的な事項の理解と定着を図るため、トレーニング的な学習活動に加えて、語句等の意味を理解し、繰り返し活用する必要があります。

一方、中学校においても、小学校同様、B問題に課題が見られました。特に、自分の考えや意見を、条件に応じてまとめたり、記述したりすることに課題が見られました。日頃から、文章全体や文章の一部に書いてある内容について、「つまり、どういうことか」という視点で捉え直し、自分の言葉で言い換えたり、まとめたりする学習が求められます。さらに、いろいろな条件に応じて文章を工夫する力を高めことも必要です。

○算数・数学の学力の状況

小学校では、計算によって正しく答えを求めることなど、基礎的な計算の能力はある程度定着しています。しかし、式や計算の意味を理解して表現することや、図の意味を理解して表現することに課題が見られました。

また、B問題については、いくつかの事象をもとにして規則性を発見する力が弱いことが分かりました。さらに、規則性を発見できたとしても、それらについて、筋道を立てて説明することに課題が見られました。

このような課題に対しては、思考力・表現力を伸ばすための言語活動を充実させることが大切です。今後は、例えば、小数や分数のかけ算の学習において、数直線や図を活用して計算方法を考えたり、立式の根拠を説明したりすることで、かけ算の意味を理解するような学習が必要です。

一方、中学校では、基礎的・基本的な知識・技能は十分定着していますが、与えられている場面・条件について、事柄が成り立つかどうかを判断して理由を説明する力に課題が見られました。中学校においても、思考力・表現力を伸ばすための言語活動を充実させることが必要です。

本市の小中学校では、平成25年度から本調査の趣旨等を踏まえた授業改善に積極的に取り組むとともに、本調査問題を活用した授業を行ったり、学力補充の取組を充実させたりするなど、『学力向上についての4つの取組』（P.31 参照）を提示し、学力向上についての重点的な取組を継続しています。

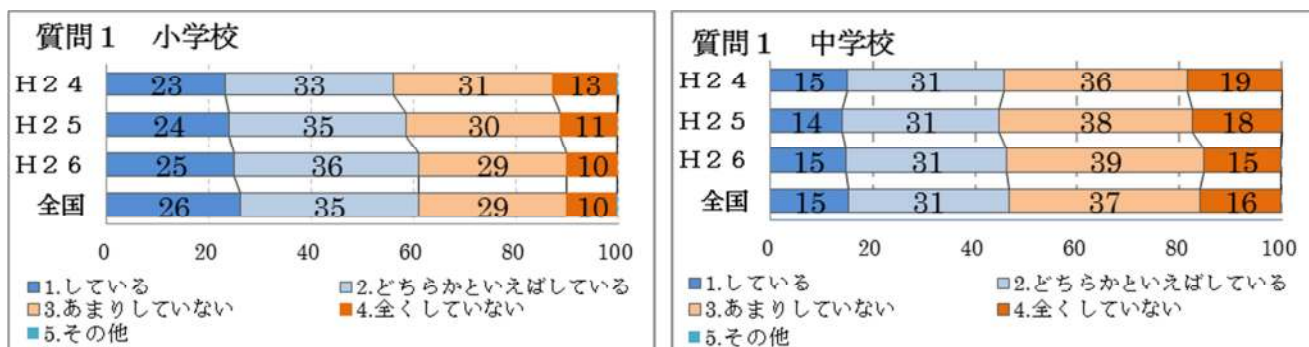
本年度の調査で明らかになった子どものつまずき等を分析するとともに、授業改善のポイントなど具体的な方策を立てて、課題の克服に向けた授業改善を進めます。

○「確かな学力」の定着に向けた家庭学習の取組

全国学力・学習状況調査では、児童・生徒質問紙による家庭での学習の状況調査や、学校質問紙による学校の取組調査も実施しています。

以前から、本市では小学生の家庭学習の定着に課題があるとされていましたが、本年度の調査では、自分で計画を立てて家庭学習を行っている子どもの割合（質問1）は、小中学校ともに全国平均とほぼ同等であり、特に、小学校ではやや増加傾向となりました。

質問1 家で、自分で計画を立てて勉強していますか

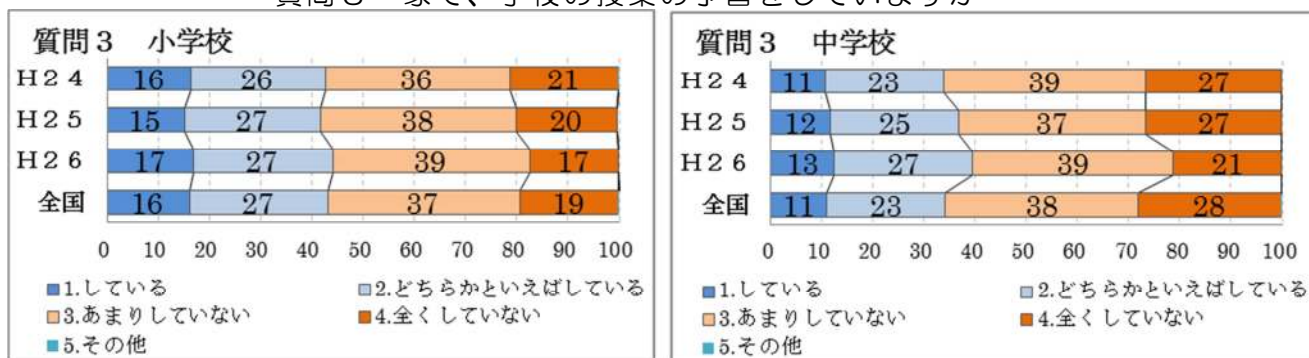


また、学校の宿題や予習・復習などの家庭学習を行っている子どもの割合（質問2, 3, 4）は、小中学校ともに全国平均並みでしたが、中学校において予習をしている生徒の割合は全国平均をやや上回りました。家庭学習の習慣が定着する子どもの割合は、年々増加傾向にあることがわかります。

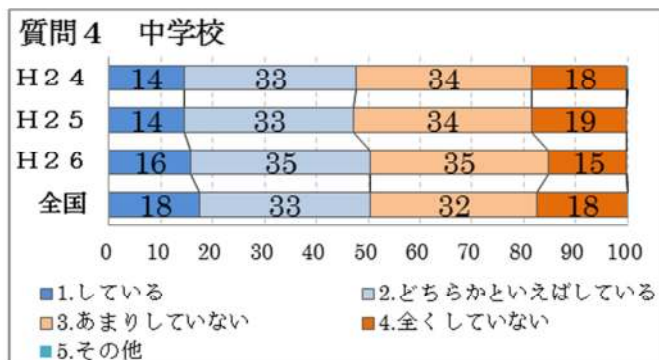
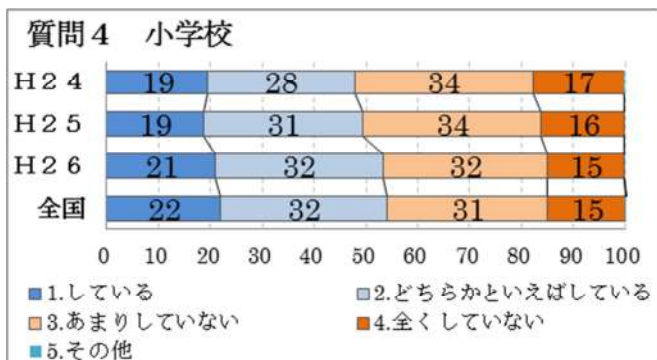
質問2 家で、学校の宿題をしていますか



質問3 家で、学校の授業の予習をしていますか



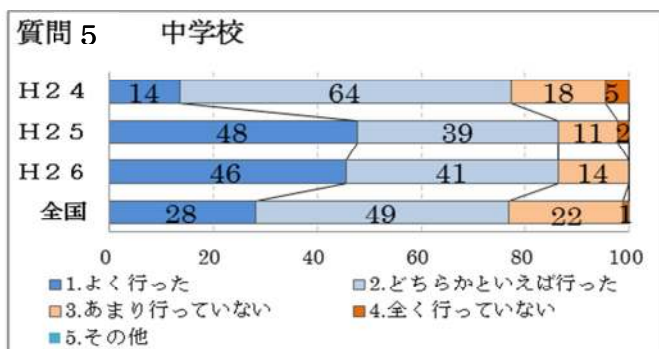
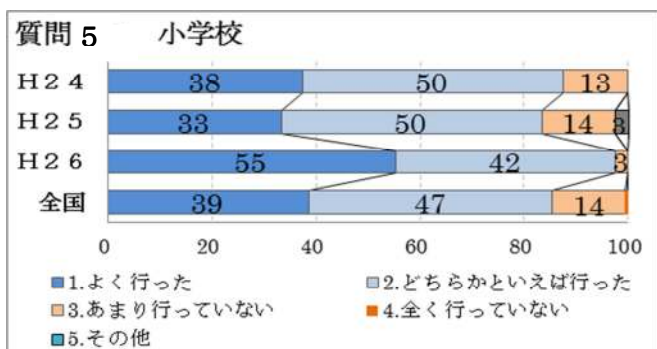
質問4 家で、学校の授業の復習をしていますか



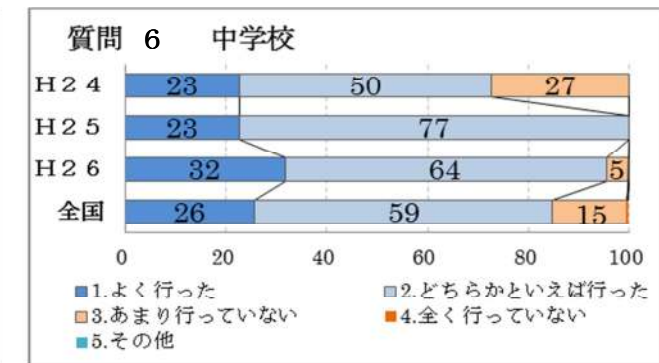
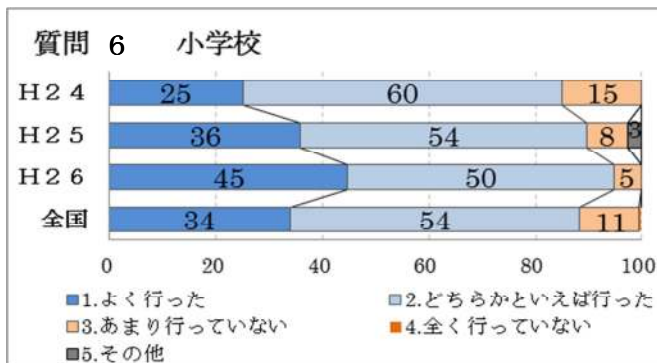
小中学校の取組に目を向けると、家庭学習の課題の与え方について教職員で共通理解を図っている学校の割合（質問5）、及び、家庭での学習方法を具体例を挙げながら教えた学校の割合（質問6）ともに全国平均を上回っています。

小中学校が、家庭学習の定着を目指して具体的な手立てを講じた結果、家庭学習に取り組む子どもが着実に増えていることがわかります。

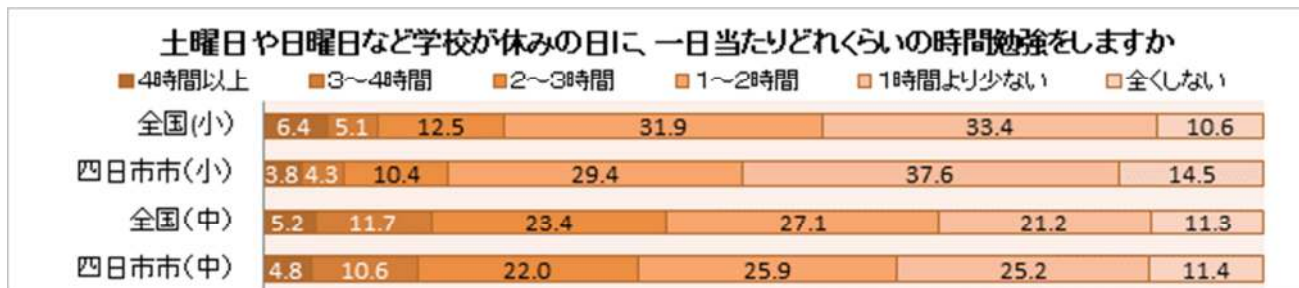
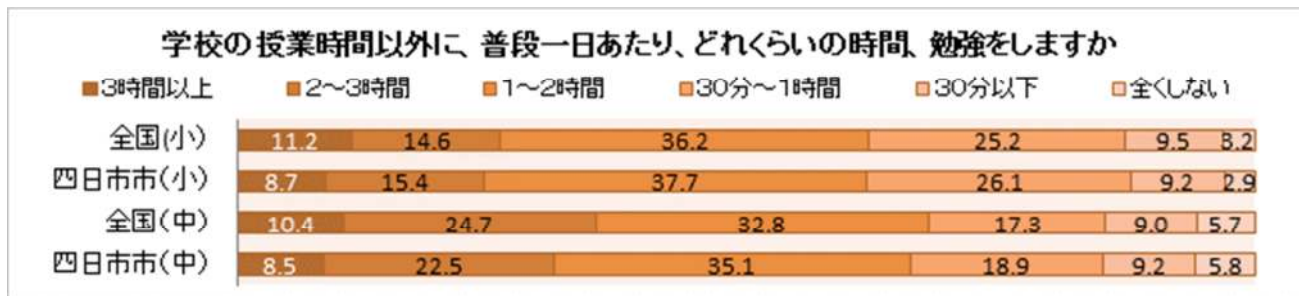
質問5 家庭学習の課題を与え方について、校内の教職員で共通理解を図りましたか



質問6 家庭での学習方法を、具体例を挙げながら教えましたか



一方、学習時間の長さに着目すると、学校の授業以外に勉強する時間は、依然として全国と比べ少ない状況が続いています。特に、土曜日や日曜日など、学校が休みの日に勉強する時間が少ないという傾向が見られます。



※「保護者向けリーフレット」の配布

平成26年度には、子どもたちの家庭学習を促す保護者向けリーフレットを配布しました(右図)。

家庭学習の習慣を定着させるには、日頃から、子どもたちに規則正しい生活リズムを身に付けさせることが大切です。

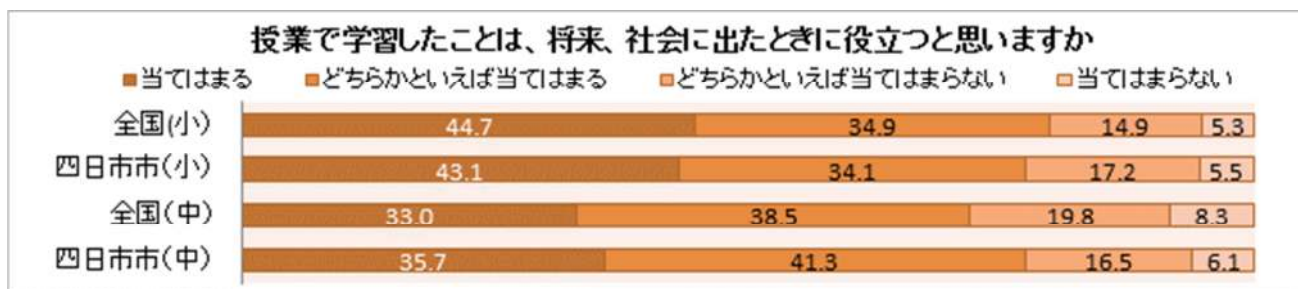
宿題に取り組むだけでなく、その日に学習したことを反復練習したり、予習をしたりして、学力の定着を図るため、引き続き、家庭との連携した取組を進めていきます。



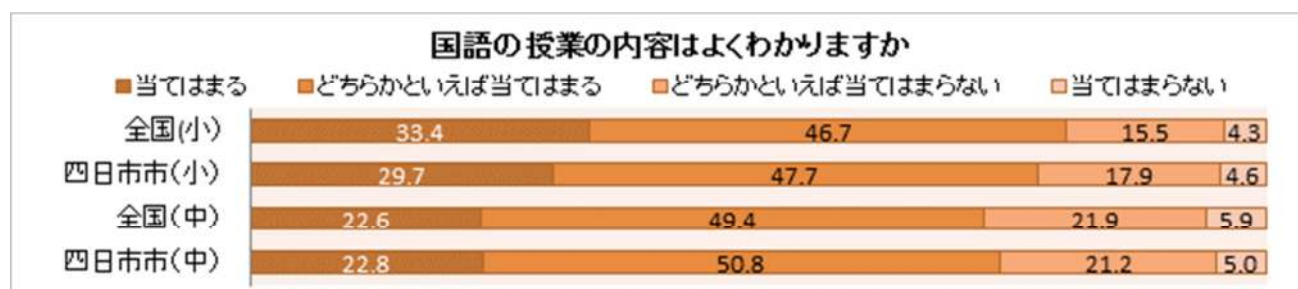
2 問題解決能力の向上

以下のグラフは、四日市市学校教育ビジョンが示す「問題解決能力を身につけた子ども」に関する質問に対して、平成 26 年度全国学力・学習状況調査（対象：小学校 6 年生・中学校 3 年生）における児童生徒質問紙の回答状況を全国平均と比較したものです。

「授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つと思いますか」の問いに対して、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した子どもの割合は、小学校で 77.2%（全国平均 79.6%）、中学校で 77.0%（全国平均 71.5%）となっています。小学校は全国平均より 2.4 ポイント低く、中学校は 5.5 ポイント高くなっています。

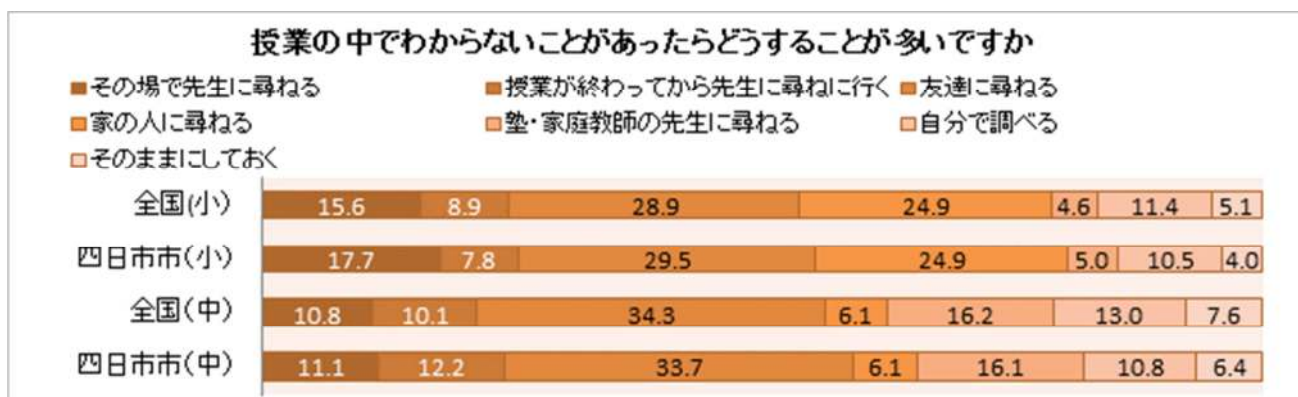


また、「授業の内容はよくわかりますか」との問いに対して、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した子どもの割合は、小学校においては、国語で全国平均よりやや低く、算数では全国平均と同程度となっています。また、中学校においては、国語、数学とも全国平均よりやや高い傾向となっています。

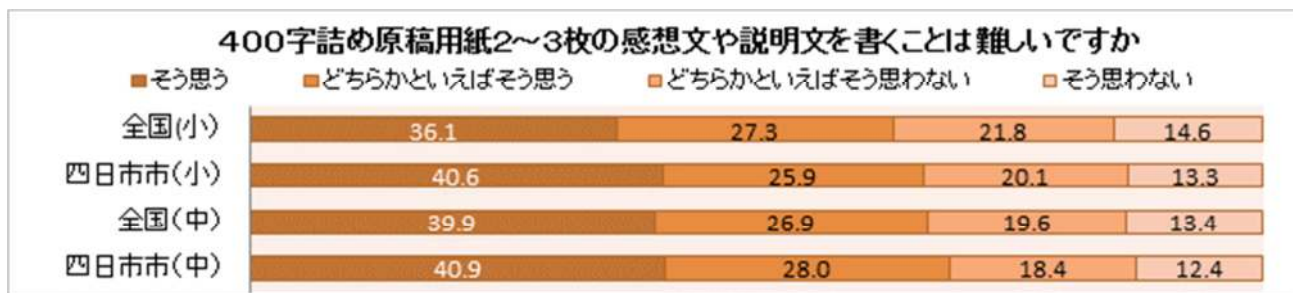


「授業の中でわからないことがあったらどうすることが多いですか」との問いに対しては、「先生や友達、家の人に尋ねて解決する」という回答が、小学校では約 85%、中学校では約 80%となっており、いずれも全国平均よりも高くなっています。

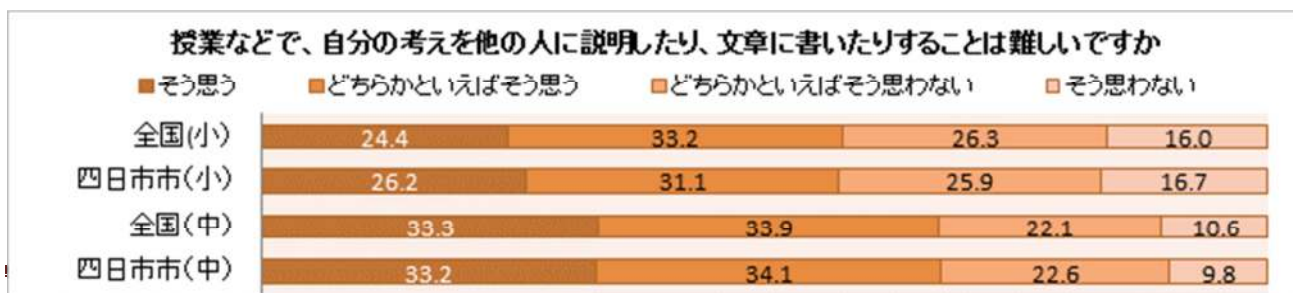
さらに、小中学校ともに、約 10%の子どもが「自分で調べる」と答えています。疑問や課題をそのままにせず、他人に尋ねたり、調べ学習をしたりして、多様な方法により解決することは、問題解決能力の向上につながっていきます。



「400字詰め原稿用紙2～3枚の感想文や説明文を書くことは難しいですか」との問いに対しては、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した子どもが、小学校で 66.5%（全国平均 63.4%）、中学校で 68.9%（全国平均 66.8%）となっています。いずれも、全国平均より高い割合となっており、長文を書くことに苦手意識を持っている子どもが多いことがわかります。



一方、「授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいですか」との問いに対しては、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した子どもが、小学校で 57.3%（全国平均 57.6%）、中学校で 67.3%（全国平均 67.2%）あり、全国平均とほぼ同様の結果となっています。



また、「友達の間で、話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか」との問いに対しては、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した子どもが、小学校で62.6%（全国平均65.9%）、中学校で64.1%（全国平均61.9%）あり、小学校において全国平均よりやや低く、中学校においては全国平均よりやや高い結果となっています。



自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることを難しいと感じている子どもが6割程度いるものの、話し合う活動を通して、友達との間で考えを深めたり共有したりすることができる子どもも6割程度いることがわかります。

このことから、話し合う活動の前には、文章を用いて考えをノートにまとめる作業を取り入れるなど、授業の中に「書く」活動を多く取り入れ、長文を書くことへの抵抗感をなくして自信につなげる工夫が必要です。

※ 問題解決能力向上のための授業づくりガイドブック（P.38 参照）

本市では、子どもたちの問題解決能力の向上を目指し、「問題解決能力向上のための5つのプロセス（四日市モデル）」に基づいて、授業に工夫を凝らしています。授業の中では、自分の考えを説明したり、文章で表現したり、それらを発表したりする活動を多く取り入れています。



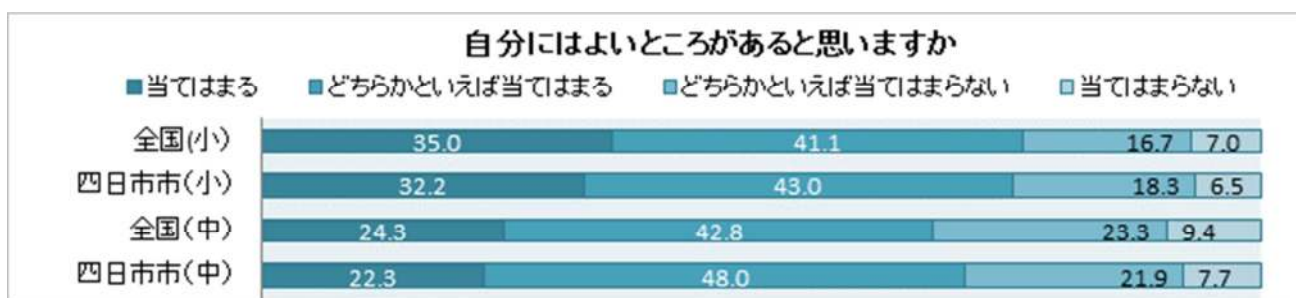
子どもたちが持つ既存の知識・技能を活用して、問題を理解し、解決方法を導きだし、熟考するというプロセスの中で、子どもたちの問題解決能力の向上を図っています。これらの授業では、一人一人の児童生徒が考えたことを説明したり、問題ととらえたことを共に考えあって解決したりしています。今後は、さらに、授業で学んだことを日常生活で活用するなどの経験により、学ぶことに対する有効性を実感させていく必要があります。

3 豊かな人間性

本市では、豊かな人権感覚や規範意識を身につけ、将来において社会的に自己実現ができるような子どもの育成を目指しています。

以下のグラフは、四日市市学校教育ビジョンが示す「豊かな人間性を身につけた子ども」に関して、平成 26 年度全国学力・学習状況調査（対象：小学校 6 年生・中学校 3 年生）における児童生徒質問紙の回答状況を全国平均と比較したものです。

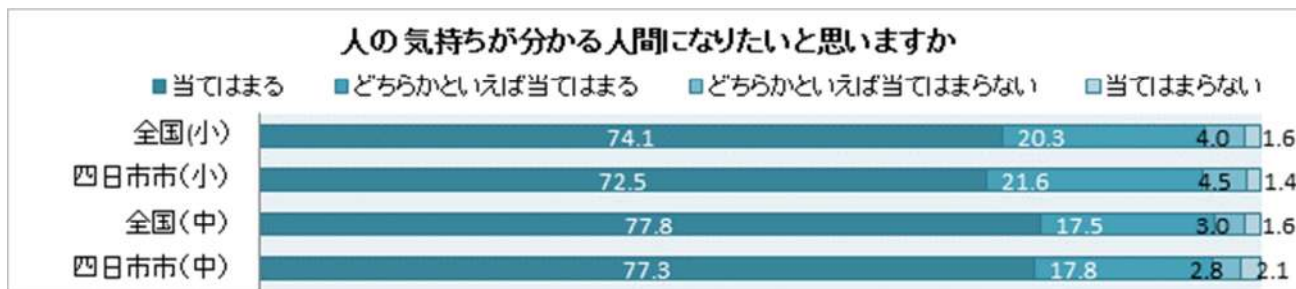
下のグラフから、本市の子どもの自己肯定感については、肯定回答（「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」）をした子どもの割合が、小学校では全国平均と同程度、中学校では全国よりやや高い傾向にあります。



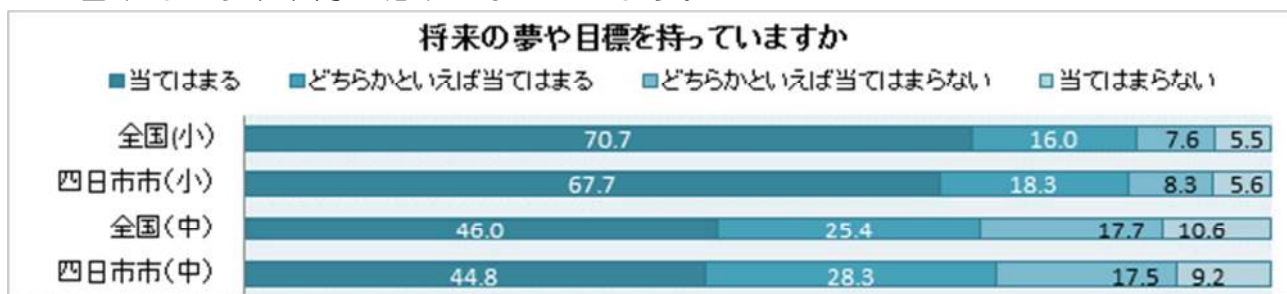
また、「いじめを許さない」との問いに対し肯定回答した子どもの割合は、小・中学校とも全国とほぼ同じ傾向にあります。小学校と中学校の回答の傾向を比較すると、「いじめはどんな理由があってもいけない（当てはまる）」と回答する割合が、中学校において下がる傾向にあり、とりわけ、本市は全国と比較しても低い割合になっています。引き続き、いじめを絶対に許さない態度や行動力を育成する必要があります。



一方、「人の気持ちが分かる人間になりたいと思いますか」との問いに対して、「当てはまる」と回答する割合は、小学校に比べ、中学校の方が高くなっています。



「将来の夢や目標を持っていますか」との問いに対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した子どもが、小学校で86.0%（全国平均86.7%）、中学校で73.1%（全国平均71.4%）あり、小学校は全国平均と同程度、中学校においては全国平均よりやや高い結果となっています。

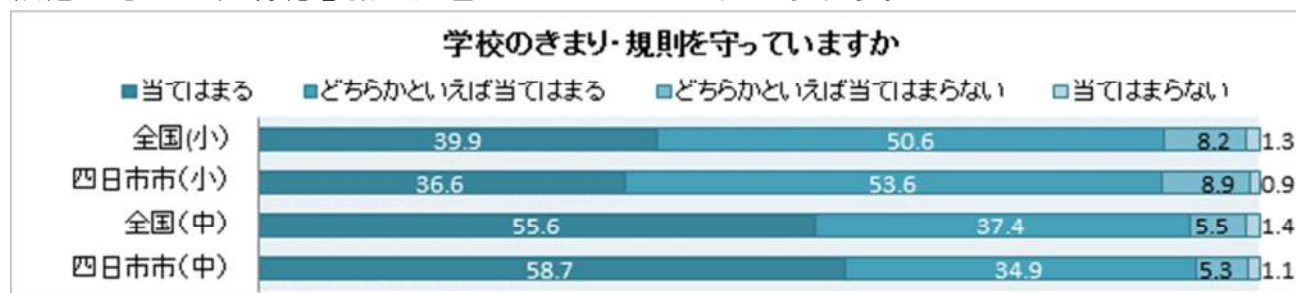


また、「ものごとを最後までやり遂げてうれしかったことがありますか」との問いに対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した子どもは、小中学校とも全国平均と同程度で、割合としては非常に高くなっています。



現在、市内の小中学校では、キャリア教育の視点で教育活動を整理した「キャリア教育に関する指導計画」に基づき、将来の社会的・職業的自立に必要な力を育てています。今後も、各校でのキャリア教育の取組を充実させるとともに、幼保小中が連携した一貫教育『学びの一体化』において、将来を見据えたキャリア教育を一層充実させる必要があります。

豊かな人間性を育む上で、規範意識を身に付けることは大切です。「学校のきまり・規則を守っているか」との問いに対し、肯定回答をした子どもの割合は、小学校で90.2%、中学校で93.6%となっており、全国平均と同様、非常に高いことがわかります。特に、中学校において「当てはまる」と回答した割合は高くなっており、発達段階に応じて、規範意識が定着していくことがわかります。



読書活動の充実も、豊かな心を育む大切な要素です。また、自然体験、社会体験、文化的な活動等に積極的に参加したり、それらの体験活動を通して達成感を持ったりすることも重要です。

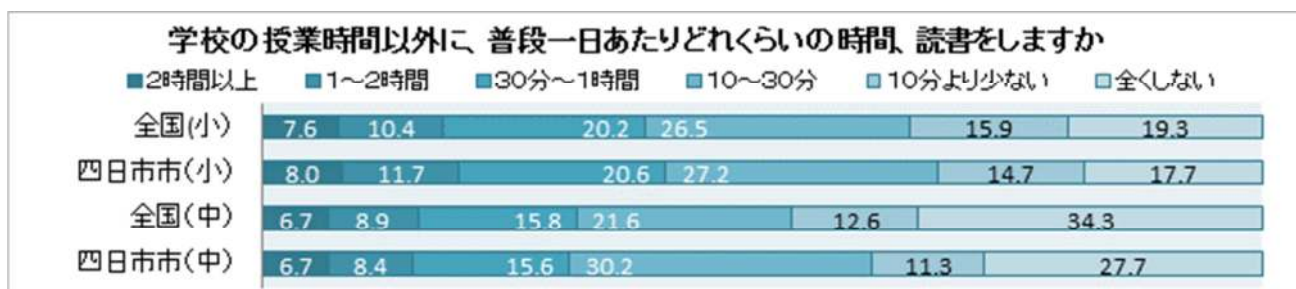
下のグラフは、子どもの読書活動について尋ねた結果です。「読書は好きですか」の問いに対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した子どもの割合は、小学校で75.3%（全国平均73.0%）、中学校で70.7%（全国平均69.4%）であり、小中学校とも、全国平均よりやや高い結果となっています。



また、「学校の授業時間以外に、普段一日あたりどれくらいの時間、読書をしますか」の問いに対し、読書を1時間以上している子どもの割合は、小中学校とも全国平均と同程度ですが、「10～30分」と回答した割合は全国平均を上回っており、特に中学校において高くなっています。これらの結果から、小学校において8割程度、中学校においては7割程度の子どもに読書習慣が身に付いていることがわかります。

一方で、「全くしない」と回答した子どもも、小学校で17.7%、中学校では27.7%となっています。

本市では、「学校図書館いきいき推進事業」により図書館司書をすべての小中学校に配置しており、学校と図書館司書、図書館ボランティアとの協働を進めています。学校の授業における読書活動の充実に加え、家庭読書支援など多面的な活動支援により、多くの子どもたちが、日常的に読書に親しむことで、子どもたちの豊かな心を育てていきます。



4 健康・体力

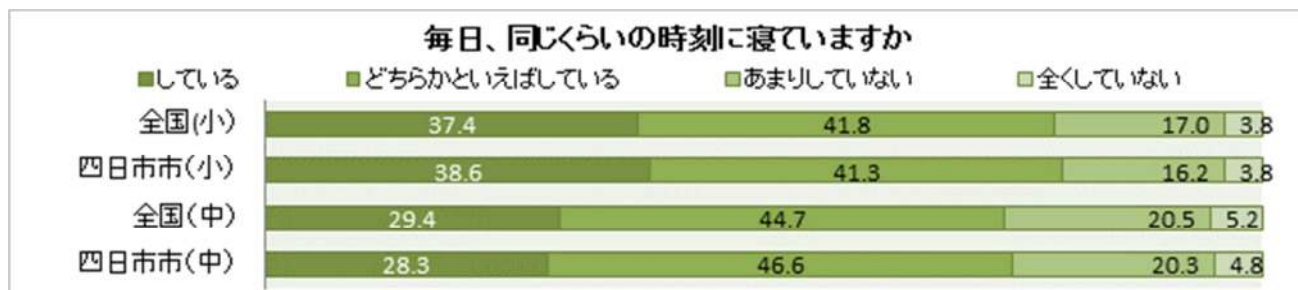
本市では、自他の健康や安全について実践していく力や、たくましく生きるための体力を備えた子どもの育成を目指しています。

以下のグラフは、四日市市学校教育ビジョンが示す「健康・体力」に関する質問に対して、平成26年度全国学力・学習状況調査（対象：小学校6年生・中学校3年生）の回答状況を全国平均と比較したものです。

「朝食を毎日食べている」と肯定回答した子どもの割合は、全国平均と同様の傾向となっており、小学校においては96.4%、中学校においては93.7%がほぼ毎日朝食を食べています。



また、子どもの起きる時刻・寝る時刻についても、全国と同様の傾向となっていますが、小中学校とも、寝る時刻が決まっていない子どもが2割程度います。



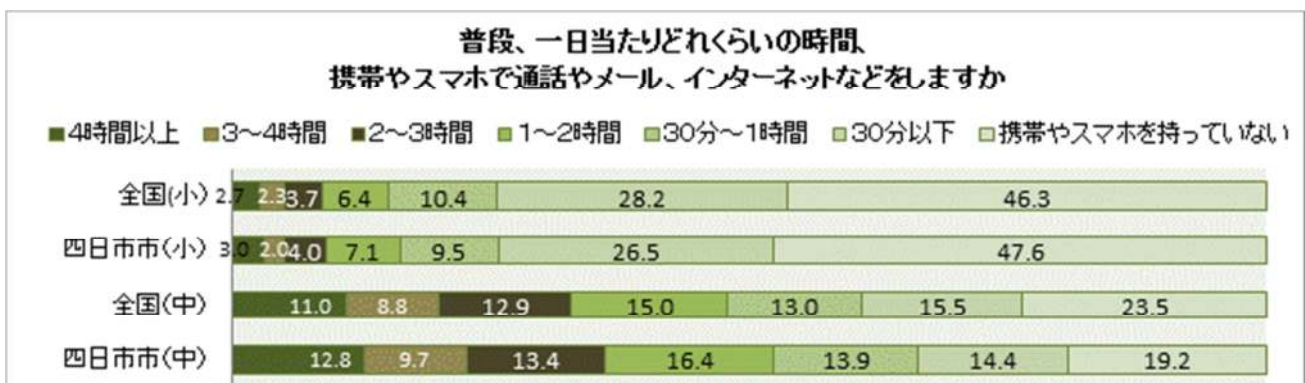
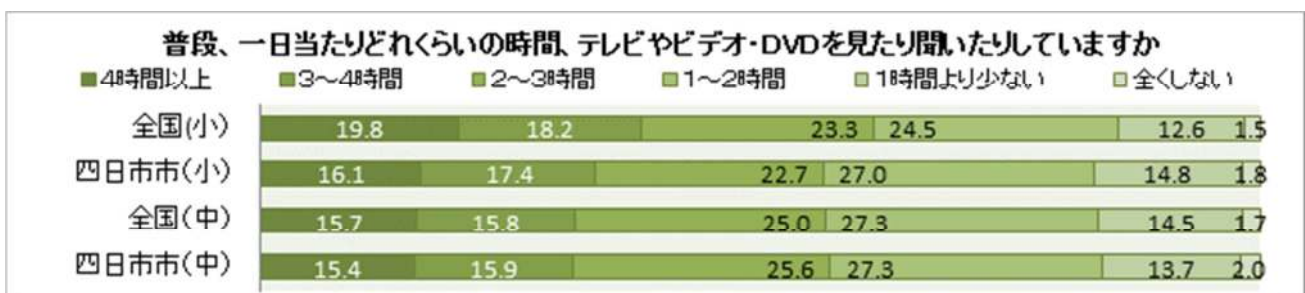
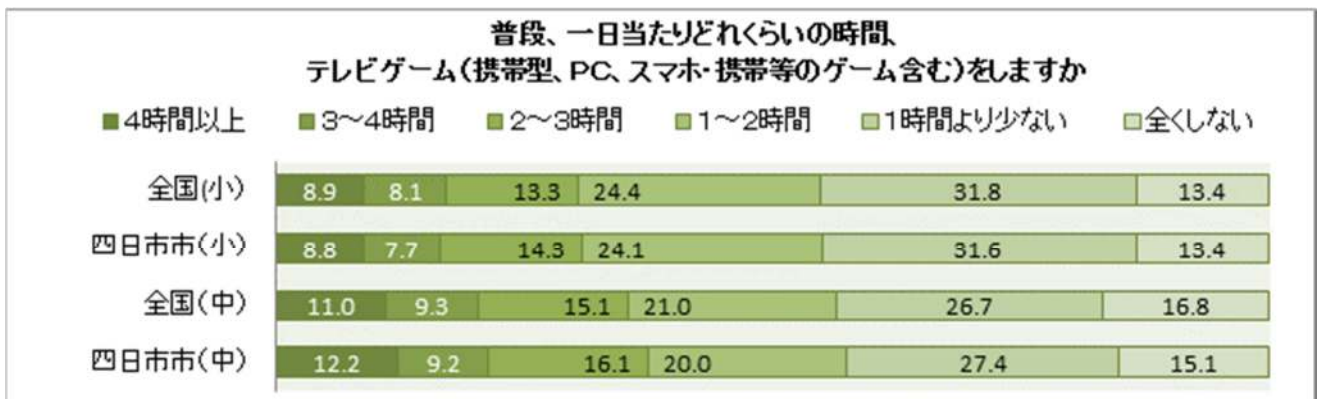
一方、子どもたちを取り巻くメディア環境も大きく変化しており、スマートフォン等の長時間使用による生活習慣の乱れなどが課題となっています。

下のグラフは、普段一日当たりどれくらいの時間をゲームやテレビ、スマートフォンなどに費やしているかを調査したものです。

テレビやビデオ・DVDを見ている時間については、全国平均とほぼ同様の分布となっていますが、テレビゲーム（携帯型、PC、スマホ・携帯等のゲームを含む）をしている時間については、1時間以上費やしている子どもの割合が、小中学校とも全国よりやや高くなっています。

また、スマートフォンや携帯を使用している時間については、小学生より中学生のほうが、圧倒的に長くなっています。とりわけ、本市の中学生の使用時間について見てみると、1時間以上使用している子どもの割合が52.3%（全国平均47.7%）と、全国平均よりもかなり高くなっており、本市の特徴を顕著に表しているといえます。

本市では、携帯・スマホの使用に関するリーフレットを配布し、親子でルールづくりを行うよう啓発しています。今後は、家庭のルールづくりとともに、基本的な生活習慣の確立・改善を促すよう、家庭と協働した取組を一層進めていきます。

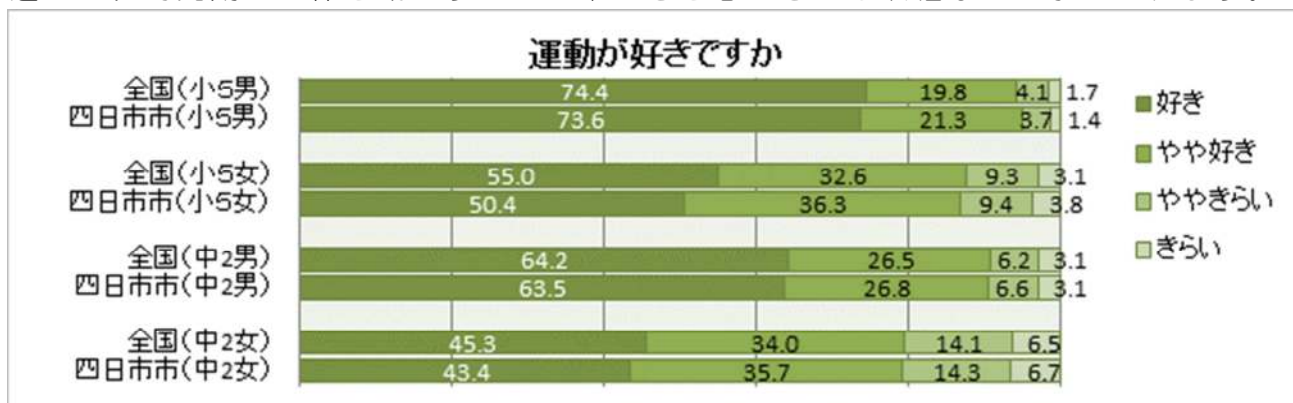


以下のグラフは、平成 26 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査（対象：小学校 5 年生・中学校 2 年生）の回答状況を全国平均と比較したものです。

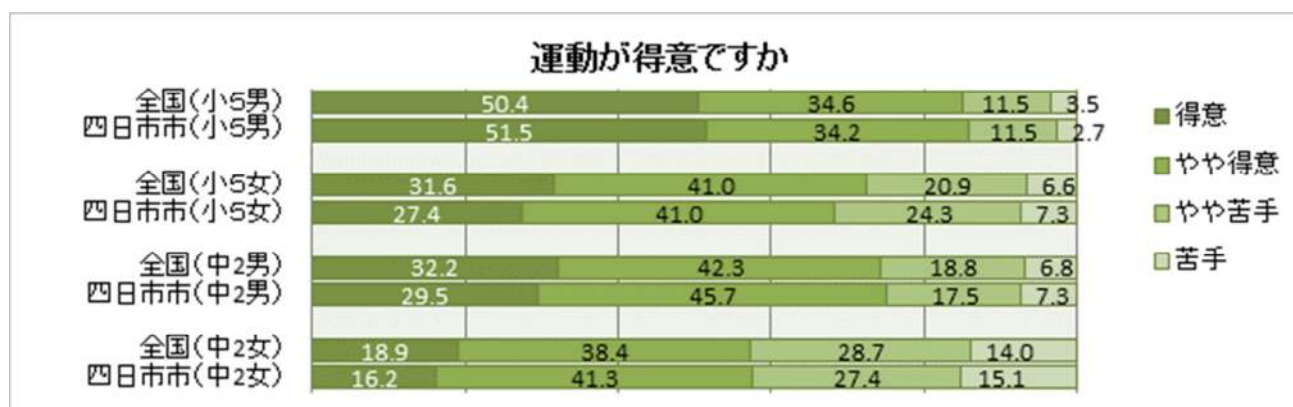
「運動が好きですか」との問いに対し、「好き」「やや好き」と答えた子どもの割合は、ほぼ全国平均と同様の結果となっています。女子よりも男子のほうが、また、中学校よりも小学校のほうが、運動を好きと答える割合が高い傾向にあります。

学校では、課題（つけたい力）の提示や振り返り活動を取り入れた授業の工夫が進んでいます。今後も、子どもたちが自分の体力や運動能力が向上したと実感できるような取組が必要です。

また、運動をきらいになったきっかけについては、小学校男子の 47.3%（全国平均 50.0%）女子の 70.0%（全国平均 60.0%）の子どもが、「小学校入学前から苦手だったから」と回答しています。このような傾向を分析し、学びの一体化の取組などを通して、幼児期から体を動かすことの楽しさを感じさせる取組などが求められます。



「運動は得意ですか」との問いに対して、「得意」「やや得意」と答えた子どもの割合は、小学校男子及び中学校男女では全国と同様の傾向が見られ、小学校女子では、全国よりやや低い傾向にあります。運動能力調査においては、すべての対象で体力テスト総合評価（5段階）で3段階以上の割合が、全国平均を下回っていることから（P. 78参照）、授業における運動量の確保とともに、運動の質を高めるような取組が必要です。

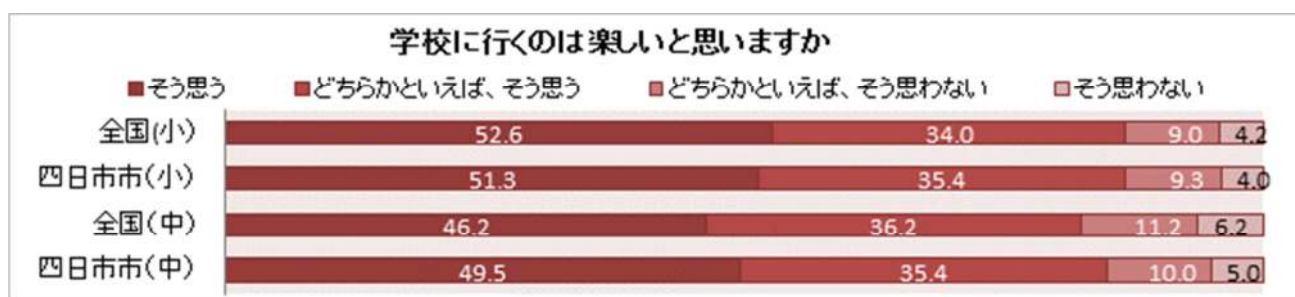


5 豊かな人間関係をはぐくむためのコミュニケーション力

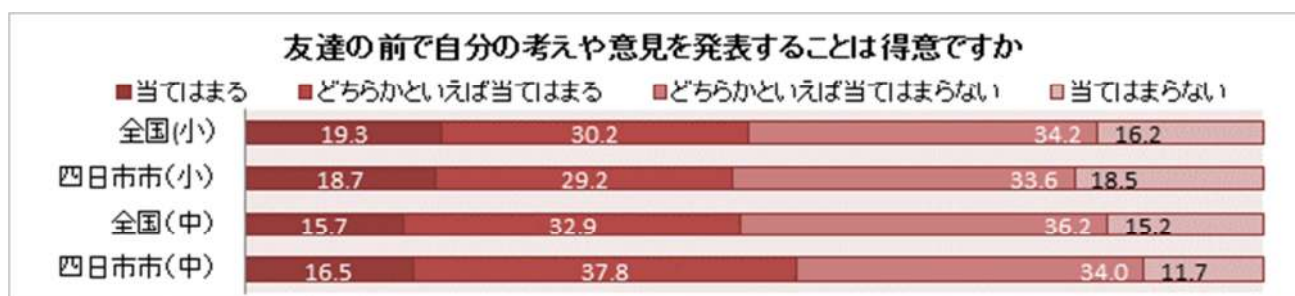
本市では、他者の意見を聴き、自分の思いを伝える力を身につけ、互いに尊重し、共に向上する人間関係を築くための資質を備えた子どもの育成を目指しています。

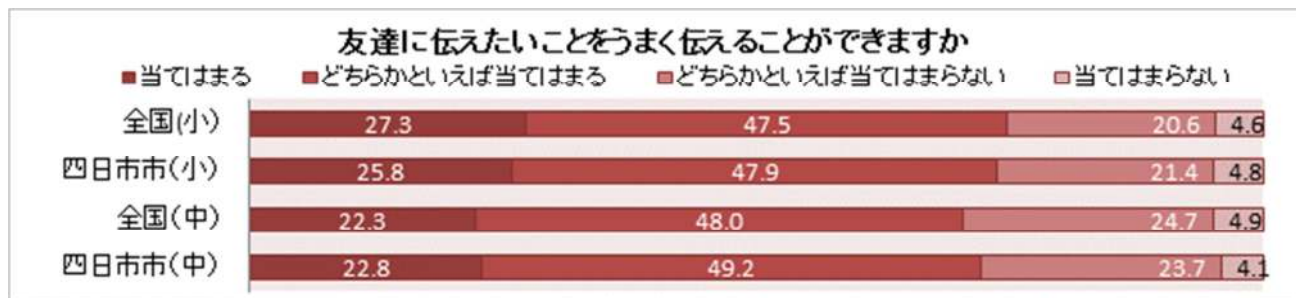
以下のグラフは、四日市市学校教育ビジョンが示す「豊かな人間関係をはぐくむためのコミュニケーション力」に関する質問に対して、平成 26 年度全国学力・学習状況調査（対象：小学校 6 年生・中学校 3 年生）における児童生徒質問紙の回答状況を全国平均と比較したものです。

「学校に行くのは楽しいと思いますか」との問いに対しては、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した子どもが、小学校で 86.7%（全国平均 86.6%）、中学校で 84.9%（全国平均 82.4%）あり、小学校はほぼ全国平均と同程度、中学校においては全国平均よりやや高い結果となっています。



また、コミュニケーションに関する質問項目「友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意ですか」「友達に伝えたいことをうまく伝えることができますか」の問いに対しては、肯定回答の割合が、小学校で全国平均と同程度、中学校においては全国平均よりやや高くなっています。さらに、「友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができますか」の問いに対しては、肯定回答の割合が小中学校ともに全国平均よりやや高い傾向にあり、いずれも 90%以上と非常に高くなっています。





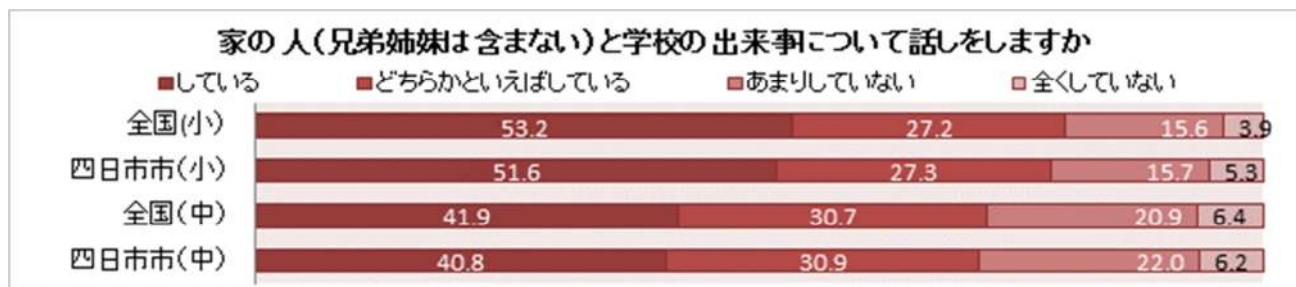
自分の思いを伝えることに自信を持っていない子どもはいるものの、他者の意見を聴こうとする気持ちが大変強いことがわかります。

学校に行くのは楽しいと答える子どもの割合も高いことから、今後も、子どもたち同士のかかわりを大切にしながら、互いに尊重し、共に向上する人間関係を築くための環境づくりを進めていくことが大切であると考えます。

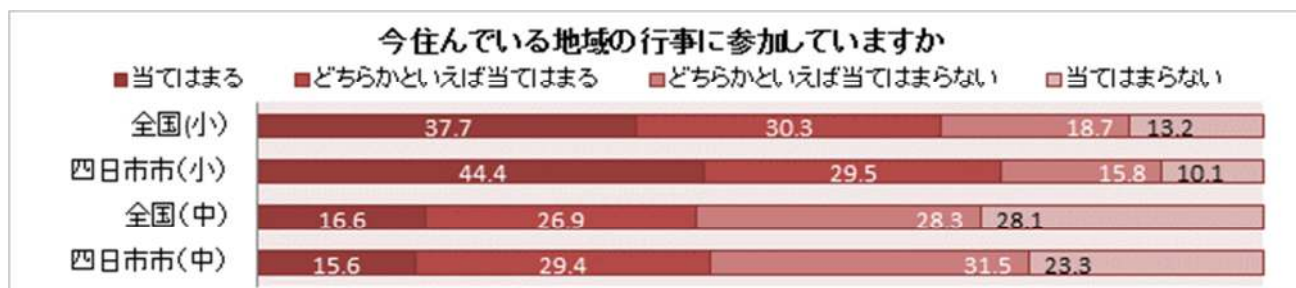
子どものコミュニケーション力を育む上で、家庭や地域の人とかかわりは、重要な要素となります。家庭や地域における子どもの様子に関する質問項目では、以下のグラフのような結果となりました。

「家の人（兄弟姉妹は含まない）と学校の出来事について話しをしますか」との問いに対しては、「している」「どちらかといえばしている」と回答した子どもが、小学校で 78.9%（全国平均 80.4%）、中学校で 71.7%（全国平均 72.6%）であり、小中学校ともに、全国平均よりやや低い傾向にあります。

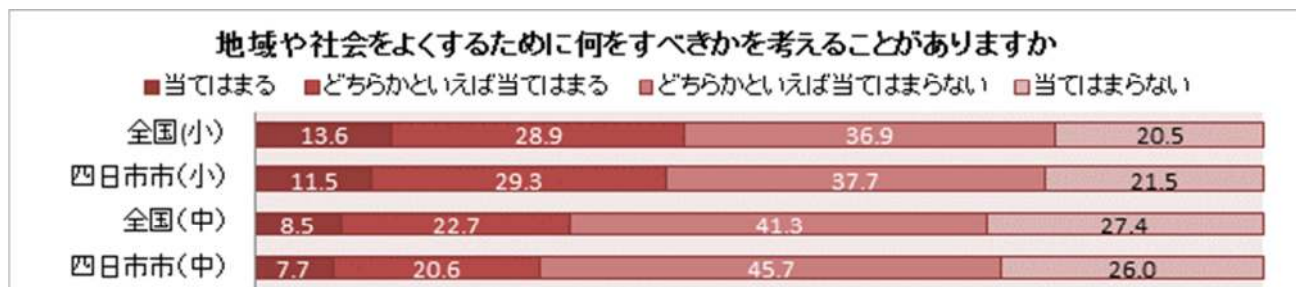
本市では、家庭での生活において携帯やスマホ等を使用している時間が長いという結果も出ています。家の人とのコミュニケーションを大切に、家庭生活における規則正しい生活習慣を身に付けることが求められます。



また、地域とのかかわりについて見てみると、「今住んでいる地域の行事に参加していますか」との問いに対し、肯定回答をする子どもの割合は、全国平均より高い傾向にあり、子どもたちと地域とのつながりの深さが伺えます。



一方、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」の問いに対しては、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した子どもが、小学校で 40.8%（全国平均 42.5%）、中学校で 28.3%（全国平均 31.2%）あり、小中学校ともに全国平均より低くなっています。



本市では、総合的な学習の時間などを活用して、地域の皆さんが講師となり、地域の文化や歴史を学習する機会を多く設けています。また、小学校においては、子どもたちが地域の行事などにかかわる場面も多く見られます。四日市版コミュニティスクールの指定校も増え、学校と地域が連携して子どもを育むための仕組みができています。

このような活動を土台にして、子どもたちが地域社会の将来を見据えて学習したり、生活したりするなどの活動を通して、地域や社会のために何をすべきかを考え活動できる人材の育成が期待されています。

さらに、学校における地域学習や地域での活動をきっかけにして、将来のまちづくりが展望できるような取組へと広げていくことが大切だと考えます。